

三番瀬の人工干潟問題 (市川市)

三番瀬を守る会 / フィールドミュージアム三番瀬の会 田久保晴孝



東京湾では、干潟・浅海域の90% (2.5万ha、千葉県は1.2万ha) が主に戦後に埋め立てられ、港湾・工場・倉庫・道路・商業施設・住宅地・レジャー施設用地などになっています。

1993年、千葉県は760haの三番瀬(京葉港二期・市川二期)埋め立て計画を発表。2001年、三番瀬を守る署名ネットワークなどによる広範な市民運動の力強い活動で、最終的に埋め立て計画は中止(760ha↓101ha↓0ha)されました。

幅1000m×奥行50m(0.5ha)を蛇籠で囲み、そこに漁船用航路の浚渫土砂を投入して造成するという計画で、総事業費は3.5億〜7.5億円です。

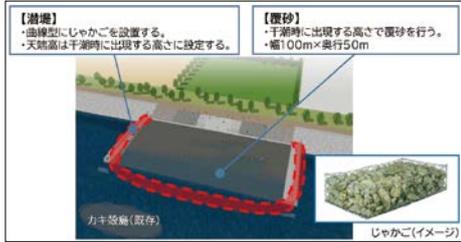
市川三番瀬を守る会などの市民団体は市川市の人工干潟計画の中止を求めて運動を続けていて、市川市民に人工干潟計画の問題点と干潟・浅海域の重要性を訴えています。ラムサール条約で謳っている湿地保全の理論や実践が、行政や市民に広まるように運動を続けていきたいと思っています。

■市川市の人工干潟計画

2023年8月、市川市(田中市長)は市民が海に触れられる場を造るため、人工干潟計画を発表しました。塩浜2丁目の階段護岸前に、

■市川市の計画に反対する理由

①土砂投入によって生物豊かな浅海域が狭まり、生きものたちが死滅します。(次項の「干潟・浅海域の重要性」を参照)
②ラムサール条約の湿地保全、ミチゲーション(代替)の考え方があ



市川市が計画している人工干潟のイメージ (市川市ホームページ掲載の図を一部改変)



市川市の人工干潟予定地の位置 (「自然通信ちば」169号より)



ふなばし三番瀬海浜公園からの眺め

りません。

③計画予定地は強い南風による高波の影響を受けやすく、人工干潟の浸食が避けられないため、土砂補給などに毎年莫大な管理費(税金)が必要になります。

④千葉県も同所で人工干潟造成を計画・検討していましたが、継続的な砂泥の補充、干潟を維持することと生きものの定着を両立させることは困難という理由で2016年に中止しました。

⑤今ある江戸川放水路(三番瀬の入江)の干潟―中流域の泥干潟や河口の砂質干潟―や市川市東浜(ふなばし三番瀬海浜公園の干潟の西側)を活用するべきです。

⑥人工干潟を利用する人に危険が及ぶ可能性があります。

■干潟の経済価値

桑江朝比呂あさひらさんは、今までは1ha当たり1千万円とされていた干潟の経済価値を、以下の①〜⑩(⑩は田久保が加える)の理由で5千〜8千万円あるという試算を発表しました。

- ①食料供給、②水質浄化、③温暖化抑制、④観光・レクリエーション、⑤教育、⑥研究、⑦昔からの特別な場、⑧日々の憩いの場、⑨種の保全、⑩リラクゼーション(精神安定)

また、及川敬貴やがひらさんは、生態系サービスをコストから眺めてみると、ミツバチの送粉は65兆円で、トヨタ自動車の売上高36兆円を上回ると述べています。

■干潟・浅海域は地球の宝

ゴカイの働き、カニの働き、魚の働き、鳥の働き……人にとつての経済的価値だけでなく、プランクトンから水鳥まで一つ一つの生きものの価値も認め、生物豊かな干潟を保全していきたいでしょう。

⑦干潟・浅海域の重要性
干潟には、なぜ渡り鳥のシギ・チドリ類がたくさん生息しているのでしょうか? それは、エサとなるゴカイやカニなどがたくさん生息しているからです。地球上で最も生物多様性・生物生産性に富むところの一つが干潟・浅海域(サンゴ礁などの潮間帯の一つ)です。

春、旅鳥のオオソリハシギは、越冬地のオーストラリアから7日間無着陸(飲まず食わず)で飛び続けて三番瀬に渡ってきます(1万km)。

三番瀬で約1カ月間、カニやゴカイなどを食べて体重を増やし(脂肪を蓄えて)、繁殖地のロシアの極北東に渡っていきます。

2月2日はラムサール条約の日である「世界湿地の日」です。また、4月14日は干潟・湿地を守る日(諫早湾が締め切られた日)です。ぜひとも水門を開けて欲しいと思います。三番瀬をラムサール条約湿地に登録しよう運動中です。ご協力をお願いいたします。

*1 国立研究開発法人港湾空港技術研究所沿岸環境研究グループ長「野鳥」(財団法人日本野鳥の会会報) 2022年10月号より
*2 横浜国立大学教授「日本経済新聞」2023年1月27日より

保全生活25年！ 3つの活動って何？

水辺に遊ぶ会 事務局 山守 巧

今から25年前の1999年7月に水辺に遊ぶ会は産声を上げました。大分県中津市に広がる遠浅の海に「中津干潟」と名付けて以来、自然観察会を中心とした保全活動を今も元気に続けています。

活動については「思いついたらとにかくやってみよう」というのが故足利由紀子初代理事長の方針？だったので、その時々知り合った人とか影響を受けたものとかをどんどん事業化していきまし

た。ササビの復元、タコツボ漁、囲い刺し網、海苔すき体験などいろいろやりました。

行き当たりばったりではあったものの、整理すると大きく3つの事業にまとめることができそうです。1つめは「正しく知って感じる活動」、2つめは「調査研究とその支援」、3つめは前の2つを踏まえた「保全活動」です。

まず「正しく知って感じる活動」については、正しく知るためには、客観的事実の積み重ねである「科学の目」を養わなくてはなりません。不定期に開かれる研修（雑談とも言

う）で会員同士の知識をアップデートしています。

でも、ただ知るだけでは不十分で、ナマの自然に全身でふれあうことが何より大切です。暑さ、寒さ、潮の香り、海や草花の色、光、味などを通して感じるものがココロに響くのだと思います。

今の時点でできる限り正しそうな情報を整理して、子どもたちや市民の皆さまに分かりやすく伝えるだけでなく、自然の中で元気に楽しく遊ぶことを心がけています。自然観察会の開催、自然を学ぶための教材の製作、小学校を中心とした環境学習、講演活動などは、そういった考えをもとに展開しています。

2つめの「調査研究とその支援」は、生物調査など基礎的なものを中心に、市民レベルで実践できる調査、分析などを行っています。もっとも正確な種同定などはシロウトには難しく、専門家の協力を得ています。今年3月にここ10年の研究をとりまとめた「中津干潟レポート2023」を上梓しました。2003年と2013年にも同様のレポートを製作しています

が、新しくなるたびに生物目録の厚みが増して今回ついに1000種を越えました。



中津干潟の観察会



「中津干潟レポート2023」の表紙



7月に開催した25周年記念講演会



中津干潟アカデミア研究発表会

また、研究者や大学生などからの問い合わせの対応、調査・研究の支援も行っています。年間のべ30回ほど大学や研究者の支援をしています。近年は、これらの方々

に協力いただき、研究内容を市民に分かりやすく説明する「中津干潟アカデミア研究発表会」「子どもアカデミア」などの催しを開催しているところです。

3つめは、文献などで正しく知り得た情報や最新の研究結果に基づいて行う保全活動です。主なものとしては、年4回行われるビーチクリーン、浜に広がる松林やため池の保全活動、地域や行政と対話しなが

調和を体感できる場所、地球と人をつなぐ野鳥と球磨川河口

八代野鳥愛好会 山崎かすみ

八代野鳥愛好会では、8月に『球磨川河口シギ・チドリ類がなげれ！E A A F P参加20年記念』事業として記念講演会を開催しました。講師に、ラムネットJより

が来てくれて、素晴らしい湿地でもある球磨川河口に住んでいることがとても誇らしくなりました。私は、親子で干潟調査の活動にも参加しています。台風が来る前に息子たちが「ねえお母さん、干潟のいきもの大丈夫かな？ 野鳥たちは？」とポツンと言いました。

柏木さんは世界地図を用いて、鳥たちが移動している様子や湿地の状況などを説明しました。一緒に参加していた息子たちは「片道1万5000キロ!?!」「鳥たち外国にも行ってるんだね、私は「小さな体ですごいね」と、親子で驚きながらお話を聞きました。野鳥が

その言葉に「ああ、よかった。ちゃんと伝わってる」と胸が熱くなりながら言葉を返したことを忘れられません。野鳥に出会い、世界を感じ地球を感じ、宇宙までも感じながら生きることができるような、次世代の子どもたちを育てていくことを今は楽しみに活動しています。一人ではできないことも、球磨川河口の干潟を大切に、集まる人たちが力を合わせて、地球と生き物が調和できる面白いシステムを考えて実践することを、「あなたは、どんなことをしたい?？」と、息子や学生さんたちとワクワクしながら計画中です。

逸見先生のお話では、特に球磨川河口のある八代海や有明海は干満の差が大きく、栄養豊富な湿地ができる場所だということでした。まさに、人間ではなく、地球のシステムが働いている場所、潮の満ち引きも考えると月も関係するので宇宙のシステムが大きく働いている場所なのだと感じしました。シギ・チドリたち



講師の柏木実さん



記念講演会の会場の様子



たくさん白鳥が飛来する瓢湖

瓢湖は、新潟県阿賀野市にあるラムサール条約湿地(2008年登録)であり、人造湖です。1626年から13年かけて、新発田藩が渇水対策のため用水池として完成させました。当時は南側にもう一つの池があり、その形が瓢箪に似ていたことから「瓢湖」と呼ばれるようになりまし。水深は平均0.7m、最大1.2mと浅く、周辺の川から取水していますが、ほとんど流れのない静水池で、オニビシやハス等が繁茂し、岸辺にはヨシやマコモが生えています。

また、瓢湖は白鳥の飛来地としても有名で、白鳥の飛来のピークは11月下旬で5千から6千羽来ます。日本一多く飛来しますが、それは湖ができた当時から多かったわけではなく、かつ自然に増えたものでもありません。白鳥の飛来が初めて確認されたのは1950年で、その年は27羽でした。その4年後の1954年に、吉川重三

郎さんが日本で初めて警戒心の強い野生の白鳥の餌付けに成功しました。このことで国の天然記念物に指定され、県指定鳥獣保護区にもなります(2005年には国指定瓢湖鳥獣保護区に)。そこから飛来数が増え、現在の6千羽に至ります。1972年には「白鳥パトロール隊」が発足し、瓢湖の自然環境や白鳥の生態を学び、環境保全の伝統を後輩に伝える活動を行っているのも、多くの飛来数を維持することにつながっていると考えます。

白鳥が注目されがちな瓢湖ですが、夏にはハスが咲き、ヨシゴイはハスの茎に忍者的のようにつかまって小魚を狙い、バンはハスの葉の上を歩き、カワセミはハスのつぼみにとまります。それらの姿や動きをとても近い距離から見ることもできるのも魅力の一つです。

結びに、これは個人的な感想にはなりますが、瓢湖と共に生きる人たちが、生態系に配慮しながら、そこから得られる恵みを利用して、自然を保護し続けてきたことが、今日の瓢湖の美しい姿につながっているのだと感じます。これからも、新しい活動が増え、美しい瓢湖であり続けてほしいです。



辺野古だけじゃない～奇跡の海・浦添西海岸を守りたい～

浦添西海岸の未来を考える会 世話人 里道昭美



イノーが広がる浦添西海岸

那覇空港から車で20分の浦添市に、沖縄の原風景ともいえるイノー(サンゴ礁)が広がる美しい浅海域があります。浦添西海岸と呼んでいます。この海が米軍港建設で埋め立てられようとしています。

1974年、米軍那覇軍港の全面返還が条件付きで合意され、1995年に移設先を浦添ふ頭地区と決定。2023年4月、軍港計画に日米が合意し、2024年8月にボーリング調査が始まりました。

戦後、条件の良い土地は米軍に収奪され、県民は海を埋め立てて開発・発展するしかなく、沖縄島の南部はほとんどが埋め立て地、人工護岸、人工ビーチになっています。浦添西海岸は米軍基地に接収されていたために開発の手が及ばず自然海岸が奇跡的に残りました。海側の一部返還で2018年に湾岸道路が開通し、通勤通学にたくさんの県民が利用するようになり、きらめく朝の海、慶良間諸島に沈む夕日の海に癒される県民のオアシスになっています。那覇空港から近く、沖縄の思い出に訪ねることのできる貴重な海です。

故翁長知事が那覇市長時代に浦添への軍港移設を容認し、継承の立場の玉城デニー知事も辺野古は反対で浦添は容認かと、オ

ール沖縄のアキレス腱だと取りざたされます。オール沖縄で頑張る私たちも、反対行動を起こす時その点が心配で、まずは学習会を開催しました。2020年、コロナ禍で厳しい時に立ち見が出るほどでした。そこで私たちは「主権者は誰ですか？ 私たち市民です。辺野古反対・基地のない沖縄を目指すデニー知事も市民の声にきっと応えてくれるはず。ここに依拠し活動を進めましょう。決めるのは私たちです」と確認しました。デニー知事を応援しながら、堂々と反対を訴えています。県議会では、浦添市区選出の県議が毎回質問し「那覇軍港の機能強化は認めない」という県の立場を確認しています。私たちの拠り所もここです。市民運動の力で、デニー知事がキッパリと反対と言えるような環境を作ることが重要です。

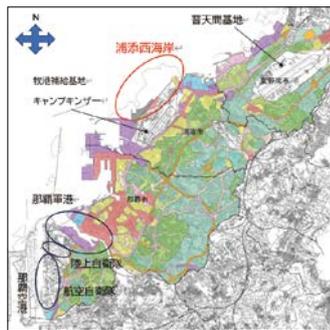
那覇市は軍港跡地の開発に意欲的で、那覇市民も「浦添のことでしょう」と言う人が

少なくありません。地域に分断を持ち込む政府の手法です。辺野古は全国区になっていますが、浦添西海岸の問題は、市民県民、西海岸にある商業施設の利用者も知らない人が多く、何より、西海岸のイノーで遊ぶ子どもたちが知りません。軍港のために埋め立てられると話す、目を丸くして驚き、「ありえない、ぜったい反対」と即答します。

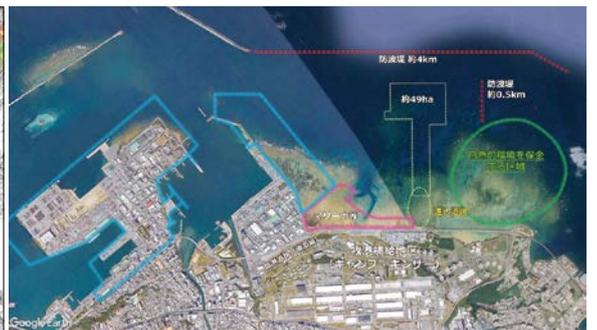
軍港返還合意から既に50年。世界は地球温暖化防止、環境保全の時代なのに、安保三文書決議以降、基地強化がすさまじい勢いで自然破壊と共に進行しています。与那国島の島民疎開が現実味を帯びるほど、もはや戦中です。

イノーで遊ぶ子どもたちはどれほど知的好奇心を刺激され、沖縄の豊かさに触れ誇りをもって成長することでしょう。それこそが持続可能な豊かな発展ではないでしょうか。

困難と思われた本土復帰をかなえた沖縄県民の未来に、沖縄の誇るべき自然を破壊する、さらなる基地負担は断固として拒否します。



浦添西海岸の位置



浦添西海岸沖の49haを埋め立て、長大な防波堤で囲む軍港建設計画

RRCEEの湿地研修会が
新潟市で開催されました

8月27日～30日にラムサール条約東アジア地域センター(RRCEE)主催による「湿地の保全とワイズユースに関する国別研修会」が開催されました。北海道から沖縄まで湿地管理に関わる行政職員、研究者、NGO、学芸員等が参加。1日目の開会式と基調講演はホテルオークラ新潟で、2日目の研修は新潟国際情報大学新潟中央キャンパスで行われました。3日目の現地視察は、福島潟と佐潟を船とバスで回りまし



浦添市西海岸開発計画に
ラムネットJとして意見提出

米軍那覇軍港の沖縄県浦添市沿岸への移設をはじめとする浦添市西海岸の埋め立て開発計画で、計画段階環境配慮書に対するパブリックコメントの募集が今年7～8月にありました。この開発計画は沖縄島中部西海岸で最も健全であるサンゴ礁生態系の破壊を伴うものであることから、ラムネットJでは、海の生き物を守る会と連名で意見を提出しました。意見書では、沖縄島中部西海岸に残された健全なサンゴ礁生態系が喪失すること、総合的に予定地の環境アセスメントを行うべきであること、評価・予測の範囲を広げるべきであることなどを指摘し、事業を中止して湿地を積極的に保全することを求めました。QRコードのページから意見書のPDFファイルを開覧できます。



インフォメーション
Information

●新潟市が湿地カードを作成 第1弾として佐潟、福島潟、鳥屋野潟、上堰潟、じゅんさい池、十二潟の6種類を市内の湿地関連施設やコミュニティセンター等で配布中です。表には湿地の写真、裏には湿地のデータが掲載されています。全種類集めた人への特典を検討中とのことです。



●有明海の不漁問題に関するシンポジウム 日程…2025年1月13日(月・祝)、場所…佐賀市内(予定)。主催…有明海漁民・市民ネットワークなど。東京大学の鈴木宣弘教授の講演や漁業者からの現状報告、討議を行います。時間、会場などの詳細はQRコードのページを参照してください。



田んぼの生物・文化多様性は守ることができるのか？
～田んぼの生物・文化2030プロジェクト実績報告会～

ラムネットJが展開する「田んぼの生物多様性・文化2030プロジェクト(田んぼ2030プロジェクト)」は、2013～2020年に行ってきた「田んぼの生物多様性向上10年プロジェクト(田んぼ10年プロジェクト)」の後継プロジェクトです。田んぼ2030プロジェクトでは、田んぼ10年プロジェクトで取り組んできた田んぼの生物多様性向上への取り組みに加え、多様な田んぼを支えてきた「田んぼ文化」の側面にもアプローチしています。田んぼ2030プロジェクトのキックオフからまもなく3年になるのを機に、この間の活動と今後の展望をみなさんと共有するために実績報告会を開催します。

- 日時：2024年11月23日(土・祝)・24日(日)
 - 場所：民間稲作研究所(栃木県河内郡上三川町)
会場40名+オンライン(Zoomミーティング)
 - 参加費：無料(要予約)
 - 申し込み：オンラインフォーム(QRコード→)
 - 主催：ラムサール・ネットワーク日本
- ※このイベントは地球環境基金の助成を受けて開催します。



湿地のグリーンウェイブ オンライン「お茶会」

ラムネットJの湿地のグリーンウェイブでは、オンライン「お茶会」を定期的に開催しています。湿地の保全・賢明な利用に取り組んでいる団体の方々に、各地の湿地の特徴やその湿地が抱えている問題などについて話題提供していただき、参加者と意見交換をするざっくばらんな会合です。みなさんも、お茶を片手にご参加ください。参加方法はラムネットJのウェブサイトをご覧ください。

- 11月27日(水) 20時～21時半
話題提供者：高橋俊吾さん(日本カブトガニを守る会福岡支部)
テーマ：カブトガニを守る活動と産卵調査(仮題)
- 12月25日(水) 20時～21時半
話題提供者：長谷川卓さん(志民委員会 潟部会)
テーマ：新潟市の潟の魅力(仮題)

ラムサール・ネットワーク日本 会員募集!!

ラムサール・ネットワーク日本(ラムネットJ)の活動は、会員の皆様からの会費や、カンパ、助成金などでまかっています。ぜひ、ラムネットJのサポーター(一般賛助会員)になって会の活動を支援してください。もっと積極的に湿地保護にかかわりたい方は、会の運営や活動を担う一般正会員としての入会をお待ちしています。そのほか、団体や企業としての入会も可能です。詳しくは事務局までお問い合わせください。

会員の特典

機関誌「ラムネットJニュースレター」を送付するほか、会員限定のメーリングリストに参加できます。ラムネットJが主催する催しの参加費が割引になる場合もあります。

入会申込方法

- 郵便振替 郵便振替用紙(払込取扱票)の通信欄に、ご希望の会員種別、お名前、住所、電話番号、Eメールアドレスをご記入の上、年会費をお振り込みください。一般銀行から振り込む場合は(払込取扱票への記入ができませんので)振り込み後に上記の申込事項をEメール、FAX、郵便等で右記の事務局までお知らせください。
- ウェブサイト 一般賛助会員、一般正会員については、ウェブサイトからオンラインでの入会も可能です。https://www.ramnet-j.org/join/にアクセスし、「入会申込フォーム」に記入して送信してください。年会費は郵便振替でご送金いただくか、オンライン決済サイトSyncable(シンカブル)からクレジットカードで送金することも可能です。

振込先

ゆうちょ銀行 振替口座 00140-0-765702 ラムサール・ネットワーク日本(一般銀行から) ゆうちょ銀行 〇ー九(ゼロイチキョウ)店
当座預金 0765702 ラムサール ネットワークニホン

会員種別と入会申込金(年会費)

会員種別	正会員		賛助会員	
	総会での議決権があります		総会での議決権がありません	
一般	1口	5,000円	1口	2,000円
団体	1口	10,000円	1口	10,000円
特別		50,000円以上		30,000円以上
企業		-	1口	100,000円

年会費(入会金)

年会費は毎年4月から翌年3月までの1年分です。入会初年度は、年度途中の入会でも入会金として1年分の会費をいただきます。2～3月に入会の場合、初年度の年会費(入会金)は無料となり、4月からの次年度の年会費としていただきます。

事務局

NPO法人 ラムサール・ネットワーク日本
〒110-0016 東京都台東区台東1-12-11
青木ビル3F TEL/FAX 03-3834-6566
Eメール info@ramnet-j.org